万葉歌碑
藤村詩碑
杜国屋敷址碑

建立記念誌

D、町内篤志者数及資金総計表……41
一〇、収支決算書……会計　木村雄夫…41
一一、除幕式概況……42
一二、建碑事業前の渥美文化協会……宮川簡吉…48
一三、感想集
伊良湖雑感……鈴木翠軒…51
万葉歌碑を国宝に……高平泉山…53
「建碑の柱となられた石井平吉氏」……宮川簡吉…54
建碑の事業を省みて……木村雄夫…59
杜国屋敷跡に思う……川合繁雄…60
建碑のこと……佐藤一英…60
偶感……粕谷魯一…61
一四、あとがき……65

まえがき

渥美町が生れたのは去る昭和三十年四月一日であった。三十二年〝三河湾国定公園〟に設定されてからは、全般に亘って観光文化向上の気運が高まり、今日では伊良湖岬にあこがれ来る観光客は年間百万とも百五十万とも言われる盛況振りを見るに至った。

更に昭和三十九年、伊良湖岬と「伊勢志摩国立公園鳥羽」とを結ぶ海上二〇キロの間には、海上国道とも言われるフェリーボートの定期発着や、水中翼船の巡航が開かれ、之と呼応して、豊橋を起点とする伊良湖岬までの旧県道四九キロが国道二五九号線にさり替えられて、その全舗装が昭和四十一年八月完工した。尚最近中部圏開発の構想が本筋に具体化しその青写真も出来たようで当町将来の発展変容は一層の目まぐるしさを加えるであろう。

本会が標題の事業を起し、去る昭和三十六年十一月十九日、それぞれの除幕式及報告追善供養の盛儀を挙げ、これが完工を見るに至ったのであったが爾後七年を経た今日ではそれぞれ観光渥美にふさわしい所を得た風物誌の一頁をかざり〝詩の岬〟〝歌の岬〟など謳われ、自然美に加えて文学的旅情を誘う伊良湖岬として遊子の旅愁をなぐさめ、益々広くその名をなすに至ったようである。　しかし乍静かに之をかえり見れば、これは偏に建碑当初、町内外の多数有志の皆さんの貴い御高志のたまものであることを深く省み、建碑七周年を記念して、茲におくればせながら、芳名録並びに事業経過・会計等の概要を誌し、以って有志各位に深甚な謝意を表明すると共に、後日の参考に資せんとするものである。

尚、本事業の完遂について、当初、事業の主となって終始奔走された故石井平吉氏、〝藤村詩碑〟の揮毫者で豊橋の俳人であった故松下木公子氏、及び潮音寺前住寂木全禅海老師の労に報いあつく各々の冥福を祈る次第である。

昭和四十三年秋日　　編者誌す

行き悩みとなっていたところの「椰子の実」詩碑の資料について

河合俊郎

そもそもの始まりは昭和三十一年の一月、名古屋市で開かれた中部日本詩人連盟の委員会で、佐藤一英氏（一宮在住）から、藤村の「椰子の実」の詩は伊良湖を素材にしたものだという話だから詩碑を建てたらどうか。たしかにラジオ放送で柳田国男氏が話していた。」というような話が出た。佐藤氏は特に熱心に強調した。その年の夏、佐藤氏らが名鉄電車の人たちにこの話をしたところ、名鉄・豊鉄が中心となって伊良湖に藤村の「椰子の実」の詩碑を建てて、観光計画に入れるという話が持ち上り、現地視察をするから根拠を教えてくれと、豊橋市在住の詩人岩瀬正男氏に連絡があった。岩瀬氏もそれから注意深く出典を調べ、藤井草宣氏（歌人）にたずねたり、小宮豊隆氏に柳田氏に話を聞いてもらうよう頼んだりして、裏付資料をさがしていたが、早速には見つからなかったらしい。

昭和三十一年九月七日、佐藤・斉藤・岩瀬氏らと新聞社の人々が、伊良湖をたずねて来て、地元の石井平吉氏や私の案内で現地視察を行った。地元古老たちの立証を基に、椰子の実の漂着地や、二、三の詩碑建設候補地まで先ばしって選んだ。一行は福江小学校で講演して地元民の関心を高めたり、文化・交通・観光関係者らを招いて準備相談などをした。七、八日にまとまった計画としては、地元に「椰子の実」詩碑建設委員会を設け、全国各地に呼びかけ立派な碑を建てることに意見が一致して、具体的な運動に乗り出すことになった。

佐藤氏は　早速東京在住の詩人今井富士雄氏を介して、直接柳田氏に碑文の染筆を頼んだところ、「このようなことは一切お断りする」という返事があって、そのまま月日が過ぎた。

岩瀬氏は　その年の十二月に、柳田氏の随筆「海上の道」というのが、昭和二十七年十月号の「心」という雑誌に載っているのを発見したという。その記事が中部日本新聞に出たので、十二月五日、私は岩瀬氏をたずね、豊橋市の詩人丸山薫氏宅で会い、その雑誌や内容を尋ねたところ、岩瀬氏も現物を見たわけではなく、同市に在住する藤井草宣氏が以前その雑誌を見て、三河地方紙に書いた随筆を見たという話で現物も切抜きもあらわれたものではないことがわかった。私は地元関係者と相談のうえ、柳田氏がじかにその事実を認めるか、椰子の実のことを書いた実物が見つかるまで、建碑運動は見合わせることにした。

もともと私は藤村の詩碑を伊良湖に建てるということに積極的ではなかった。その理由は、藤村が一度も来たことのない伊良湖というゆかりの地でない所に、今さら詩碑を建てなくとも、藤村には他にいくらでも適地があるということが一つ。もう一つは、はっきりした資料も手にしないで、聞いたり読んだりだけをたよりに、観光地のお祭さわぎに利用されると、後世になって誤解された歴史的事実を作ることになるので、無理をしない方がいいと考えたからである。親しい作家の杉浦明平氏や先輩詩人丸山薫氏らにもそれとなく相談してみたが、やはり同じ意見であり、批判的であった。もし建てるなら、島崎藤村の詩碑でなく、あくまで「椰子の実」の記念碑ということにして欲しいと、私は各方面に申し入れ、この意見は入れられて、今も詩碑ということばは刻まれていない筈である。

昭和三十二年の一月二十六日、私は名古屋の図書館まで資料捜しに出かけた。栄図書館で、『心』という雑誌はすぐ見つかった。昭和二十七年十月号の柳田国男氏の連載随筆「海上の道」（1）に、椰子の実を拾い、藤村に話し、作詩されたいきさつが精しく述べられている。この文は書かれて六年しかたっていないし、生証人柳田氏は健在だから、信用すべき唯一の資料であるので、重要な個所だけを写しとって帰った。

まず、時代については、こう書きだしてある。「途方もなく古い話だが、私は明治三十年の夏、まだ大

学の二年生の休みに、三河の伊良湖崎の突端に一ヶ月余り遊んだ。」

場所は、伊良湖の「小山の裾を東へまわって、東おもての小松原の外に舟の出入りにはあまり使われていない四、五町ほどの砂浜」と書かれてある。今の伊良湖燈台のある最尖端の山を東南にまわったところ現在売店のある南西海岸だろうと思われるが、あの辺の地形は明治と今では随分変っているから、村の古老に後で確かめてみたが、やはり「小浜」と今も呼ばれているそこだった。今記念碑の建っている所から西に遠望される個所で、碑のある場所ではないことを確認し、記録しておかねばならないと思う。

柳田氏は、毎日日課のようにその海岸を散歩して、椰子の実を三度拾った。「一度は割れて真白な果実の露はれていたもの、他の二つは皮に包まれたもので、どの辺の沖の小島から海に泛んだものかは今でも判らぬが、ともかく、遥かな波路を越えて、まだ新しい姿で斯んな海辺まで渡って来ていることが、私には大きな驚きであった。」と当時の情景を記している。尚明治三十四年七月稿の『遊海島記』にもこの文のもとが昔の名文で次のように書かれている。

「……嵐の次の日に行きしに、椰子の実一つ漂ひ寄りたり。打破りて見れば、梢を離れて久しからざるにや、白く生々としたるに、坐に南の島恋しくなりぬ。」と。

前の「海上の道」の文にもどると、続いて「この話を東京に還って島崎藤村君にしたことが、私にはよい記念である。今でも多くの若い人たちに愛誦されている〃椰子の歌〃といふのは、多分は同じ年のうちの製作であり、あれを貰ひましたよ、と自分でも言はれたことがある。」と書かれてある。この記録を見ると、柳田氏の話がヒントになり素材となって藤村の「椰子の実」の詩は生れたのだということははっきり確認された。「些々たる私の見聞も亦不朽のものとなった。」と柳田氏が喜びとともに報告しているのも意味がある。柳田氏の文中に「多分は同じ年のうちの製作で」とあるのは思いちがいで、明治三十一年の十二月に出版した詩集「夏草」には書かれておらず、翌年の雑誌「新小説」に発表され、三十三年出版の詩

集「落梅集」に改めて収められたというのが正しい史実である。

行き悩みとなっていた資料は見つかったがいろいろの事情で、現在の「椰子の実」の碑が建つまでには、それから五年もかかった。佐藤氏が第一声をあげてから六年目の昭和三十六年十一月十九日詩碑除幕式が行なわれるまでのいきさつは、他の人が記録するだろうから省くが、今は故人となった石井平吉氏と、その手足となって働いた宮川簡吉氏・粕谷魯一氏の努力は銘記されなければならないと思う。四〇・一・一五

「杜国屋敷址」のこと

粕谷　魯一

(一)

貞享・元禄の昔、名古屋の蕉門の俳人であった坪井杜国が、当時尾張徳川藩の法度であった〃米延商〃をした科に由って、領地追放の刑に処せられた。

貞享二年の秋もまだ早い八月の頃、はじめ畑村に移り、程なく保美に移居して凡そ四年半程の余生を不遇の裡に送り、遂に元禄三年三月二十日、病のため客死したことは、現に潮音寺内に祀ってある杜国の墓碑の銘文が語る所であるが、この墓碑は杜国歿後五十五年の延享元年、当時保美の俳人家田路喬が、潮音原の大松樹のもとに葬った杜国の墓印の上に改め建て、手厚く追善供養を修したものと伝えられている。

其の墓碑は、爾後明治三十年頃迄は、潮音原の一角（現・原の嶋四二番地岡田茂平翁の宅地内）に在った無縁仏の墓地に放置されてあって、他に在銘の六地蔵（在銘・願主宮川善左ヱ門、享保十九年七月廿四

除幕式概況

▼「椰子の実」の詩碑除幕式次第

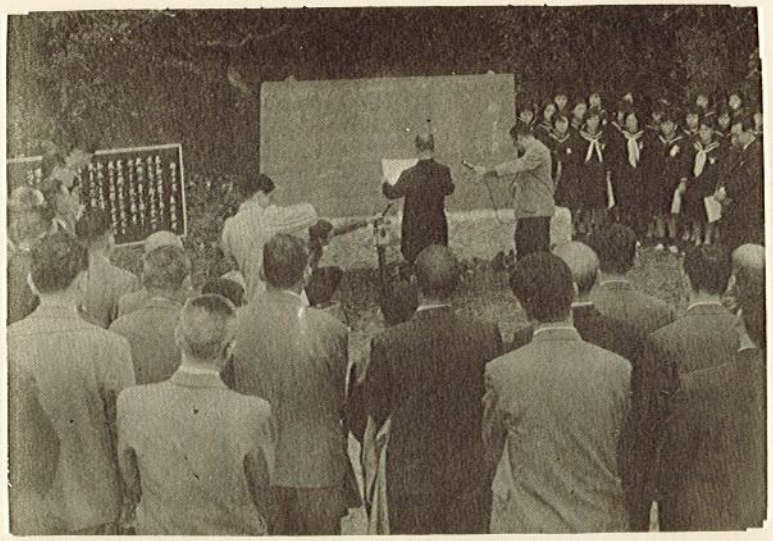
（午前十時～正午）

一同敬礼	典礼　木村雄夫
開式の辞	日出区長　小久保二二二
修祓・献饌・祝詞	畠神社宮司　天野直松
除幕・稚児	岡田輝子
「椰子の実」の歌合唱	岬中学女子合唱団三〇名　粕谷哲朗
式辞	町長・建碑委員会長　岡田義一
経過報告	建碑委員会副会長　石井平吉
祝辞並講演	中部日本詩人連盟理事長　丸山薫
玉串奉献	町長・来賓代表・一般代表
謝辞並閉式の辞	建碑委員会副会長　鈴木権六

▼「万葉歌碑」の除幕式次第

（午后二時～全四時）

一同敬礼	詩碑に同じ
開式の辞	伊良湖区長　山本茂次
修祓・献饌・祝詞	須賀社神宮　鈴木大三
除幕・稚児	長尾裕子　長尾照子
式辞	詩碑に同じ
経過報告	同前
祝辞並講演	愛知大学教授　久曽神昇
玉串奉献	詩碑に同じ
謝辞並閉式の辞	同前



〃椰子の実〃詩碑除幕式

〃万葉歌碑〃除幕式

いや私情であろうが。ともかく過去八年間持ちつづけて来た編集上の心がまえの第一は、徳川家康公遺訓の最初の「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如しいそぐべからず。」との教えを腹に据えてかゝった。

記述に当っては『春秋（穀梁伝）』の中の、「著シキハ、以テ著シキヲ伝エ。疑ハシキハ、以テ疑ハシキヲ伝フ。」という昔の史家が研究の指針ともなした教訓の前半の趣旨に則っとる事を主眼と成し、後半は之を敢えて割愛した。之も生きて恥多き老骨の私情であろうが之は後日公表したいと思う。

四、昨年は恰も明治百年相当年で意義深い年柄であった。本誌発刊も建碑七周年記念日にと、個人的な気持で、之が題字も早目に高平泉山氏にお願い致し揮毫を戴いたものであった。

今回発刊に当っては編集人の責任において、如上の意をふくめ敢えて之を改めなかったことを断っておく。併せて高平泉山氏の労に一言謝意を申し上げる次第である。

五、編集人の個人名を奥付に附したのは、出版物の常識に従った。それは一面には本文の各項目中、署名の在るもの（感想集・外五、六）を除く、他の項目の文責の所在を明かにしたまでゞ他意ないことを断って置く。

六、本誌印刷刊行について、豊橋市前畑町の富士印刷株式会社が寄せられた御厚志に深甚なる謝意を申し上げる次第である。

昭和四十四年九月二十日

昭和四十四年十月二十日　印刷
昭和四十四年十月三十日　発行　（非売品）

編集　渥美郡渥美町大字福江字下紺一二　粕谷魯一

発行　渥美建碑委員会

印刷　豊橋市前畑町三八番地　富士印刷株式会社